

“筑波”地域に位置する北条商店街に関する人類学的研究

宮本朱菜

本研究の目的は、つくば市の北条商店街の持つ文化の一端を明らかにすることである。北条商店街の位置する筑波山麓地域は、途切れることなく歴史を辿ってきた国内有数の地域である。北条商店街はそれらの歴史の中で繁栄と衰退の両方を経験し、近年では学生を交えた振興活動も行われた。特に振興の前後では商店街の雰囲気や印象が大きく変わった。

これらの時代背景の中で育まれた現在の商店街の持つ文化を調査するため、本研究ではエスノグラフィー（参与観察及びインタビュー調査）の手法を用いる。本研究ではアンケート調査等の定量的な研究だけでは明らかにすることが出来ない一人一人の思いや考えを汲み取り、地域の持つ文化の概要を明らかにするためこの手法が最適であると判断した。数値で表すことが困難なその土地の雰囲気や習慣を知るためにも調査者が自らフィールドに訪れることは意味を持つ。

本研究の調査から、研究施設が密集し、つくばエクスプレスの通るつくば駅を中心とする地域を指すひらがな表記の“つくば”地域と、筑波山麓の歴史ある建物が立ち並び、北条商店街も位置する地域を指す漢字表記の“筑波”地域には大きな文化の差があることが明らかとなった。特に、“筑波”地域の持つ特有の「頼る文化」、「過去思考」は“つくば”地域ではほとんど見られない。「頼る文化」の形成には、“筑波”地域のもつ“ゲマインシャフト”的社会的持つ性質が作用しているものと考えられる。また、長い年月をかけて構築された人間関係に生まれる信頼関係と振興活動や竜巻被害の復興活動を経験していることも大きく関係しているであろう。「過去思考」には、抗うことのできない時代の流れを経験し、繁栄と衰退の両方の歴史を持つ地域であることが起因していると考えられる。振興活動においては、“ヴォランティア・アソシエーション”的性質を持つ振興会が営利を追求する商店街を振興することによる矛盾が、振興の効果性への課題と振興への認識の差を生み出していることが分かった。移り変わりの激しい学生と地域との継続的な連携には課題も多いが、振興活動に携わった学生と地域との間には“フィクティブキンシップ”と呼ばれる関係性が築かれている。この地域と学生の関係性は地域経済発展の面で先進的な事例であると言えるだろう。

これらの研究結果から“筑波”地域に所在する北条商店街の持つ複雑なフィールド概要の一端が明らかとなった。学生と地域の連携による振興活動は少子高齢化の進む現代の日本社会で必要とされ、大学組織は大きな期待を受ける。しかし、大学と地域が単純に連携するだけでは振興は進まない。地域振興には地域特有の文化背景を知ることが必要であり、効果を検証する長期的な視点が必要とされていることが本研究によって示唆された。

(指導教員 照山絢子)